農村に暮らす―藍澤南城の田園詩―

村山　敬三

一　序

越後柏崎の藍澤南城（あいざわなんじょう）（一七九二～一八六〇）は江戸期の儒學史・漢文學史にはほとんど登場してこなかった人物で、これまであまり知られていない儒者であり詩人であった。[一] 南城は學塾三餘堂を開いた教育者でもあるが、南城は塾の經營をしながら多くの田園詩を作っている。彼の制作した詩文は『南城山人三餘集』[二]（以下『三餘集』と略稱）十七卷としてまとめられている。そこに收錄された詩のおそらく半分以上は田園詩が占めるものと考えられる。[三] 南城は農村に暮らしながら、日常目にする光景や感慨を題材として日々詩の制作を行っていたのであろう。

あまり注目されなかった南城の詩も現代に至って、目崎德衛氏の『藍澤南城私抄』[四] と内山知也氏の『藍澤南城　詩と人生』[五] が既に出版され、彼の詩の評價が次第に高まっていると感じられる。内山氏の著には南城の詩論が紹介されているが、これまで南城の田園詩に特に着目した論考は見られない。いったい彼の作った田園詩はどのような特色を持つものなのであろうか。農村地域の風土やそこに暮らす人々の生活はどのように詠われているのであろうか。また、それらの作品を生み出した南城の生活は一體どのようなものであったのか。そしてまた田園詩における描寫

の上で、彼に特に影響を與えた詩人はいるのであろうか。以上の點について考えてみたい。

二　南城の生活

（一）　三餘堂

南城の住まいでもある三餘堂はどんなところに、どのように建てられていたのか。三餘堂のあった南條村は日本海に注ぐ鯖石川（さばいし）に沿った農村である。村の東側には標高五百メートルほどの八石山（はちこくさん）が丸い頂をいくつか連ねながらゆるやかに横たわっている。三餘堂はその八石山の麓から、坂道を少し登った所に建てられていた。そこで南城は、自分の住まいを「山居」または「山中」などと表現している。三餘堂からは、はるか遠くまで田園が見渡せたであろう。

三餘堂は廣い敷地を持っていた。藍澤家に傳わる『藍澤三代記』には、三餘堂を紹介して「庭園は千坪に及び、築山を背にして松杉竹林に圍まれ、築山には、小瀑布がかかり、その流れを池に導くようになっている〈築山泉水庭園〉で、庭全體に多數の石組飛石を配す」と書かれている。小瀑布の流れがあったというが、その流れのどこかに水車もあった。寄宿舍を備えていた三餘堂の大きさは『北越詩話』に「樓屋宏壯。東西五間。南北十五間。優に百人を容るべし。[六]」と説明されている。學寮があったからであろう、三餘堂は近隣の人たちからは「リョウ」と呼ばれていたらしく、この呼稱は最近まで地域に殘っていた。

南城の『論語私説』卷二の注釋の中に次のような部分がある。[七] 南城が自分の生活を説明しているのである。

倦則出巡山田、臨園池。青青之苗、潑潑之魚、可以陶瀉焉。竹間之逕、松下之石、可以盤桓焉。

（倦みては則ち出でて山田を巡り、園池に臨む。青青たる苗、潑潑たる魚、以て陶瀉すべし。竹間の逕、松下の石、以て盤桓すべし。）

「園池」とは三餘堂の庭のことであろう。仕事に疲れると外に出て近くの田を歩いたり、庭の池を見たりする。青青とした苗や泳ぎ回る魚を見ていると憂いがはれる。竹林の道を歩き、松の下の石で休んだりしていても樂しい、と言う。

このように見てくると、三餘堂は意外に規模の大きな私塾であり、僻村には似つかわしくないほど立派な私邸である。入門者についても『北越詩話』に「富豪の師弟多し」とあるように、越後各地の名家や庄屋などの師弟が多かった。地域の尊敬を得ていたと思われる南城のもとには、たとえば山から切り出された瀧石と呼ばれる、珍しい庭石がその運搬の困難さにもかかわらずいくつも届けられたりしている。(八) このような三餘堂に暮らしながら、南城はどのような態度で地域の人々に接していたのであろうか。次の詩は『三餘集』巻十四に見える「嘉納途中」と題するものである。

友人招我度河津　　友人我を招きて河津を度る。
行見水村耕作頻　　行く見る、水村耕作の頻りなるを。
自愧農事身獨逸　　自ら愧づ、農事身獨り逸するを。
讓途趨避裸裎民　　途を讓って裸裎の民を趨避す。

友人に招待され川の渡し場を渡った。見ると川岸の村では耕作が盛んに行われている。この農繁期に私一人安逸に過ごしていることが心苦しい。すれ違った半裸の農民に思わず恥じ、私は小走りで道を讓った、と詠っている。廣い庭を持ち、大きな私塾を構える儒者とは思えない態度である。「友人我を招き」「自ら愧づ、農事身獨り逸

する」とあるから、おそらく南城は酒食を伴う席に呼ばれたのであろう。しかし、それは友人が招いたものであり、地域の農民に對して恥じることではない。こうした謙虚な態度の背景には南城のどのような考えがあるのだろうか。

（二）南城と農業

南城の思想や生活を知ろうとするとき、最も重要な資料は『三餘集』ということになるが、その他にも「南城三餘堂　塾式」[九]などの資料がある。それらによって南城と農業との結びつきを考えてみたい。『三餘集』を見てゆくと、彼の農業を重視し、農民を一種の敬意をもって見つめる態度が感じられる詩は多くある。たとえば、「夏日山荘雜詩」（巻三）その三は次のような詩である。

四月薫風芍藥香　　四月の薫風、芍藥香ばし。
農家時務正忙忙　　農家の時務正に忙忙たり。
花雖誠美過無顧　　花は誠に美なりと雖も過ぎて顧みるもの無く、
薇未全剛采不遑　　薇は未だ全くは剛ならざるも采るに遑あらず。
民食欲窮纔及麥　　民食窮せんと欲して纔かに麥に及び、
婦功將半又移秧　　婦功將に半ならんとして又秧を移す。
吾儕游手多慙德　　吾が儕游手、慙德多し。
困誓一篇何可忘　　困誓の一篇、何ぞ忘るべけん。

薫風が吹いて芍藥のよい香りがただよう頃、農家の仕事は忙しい盛りである。花の美しさをゆっくりと眺める餘裕もなく、ぜんまいを採りにゆく暇もない。農家では食糧がなくなりかけた頃やっと麥が實り、機織りがまだ途中

でも女はまた田植えに出かける。我々は手を遊ばせていて不徳を恥じるばかり、せめて苦しくても學問に勵まなくてはならない[十]と結ぶ。また、南城自身のことについても、「山莊偶筆」（巻五）その二では、「農書時に或いは讀み、法に依りて園蔬を養ふ。[十一]」とあり、彼は農書を讀んで、畑も持っていたことも知られる。[十二]

『三餘集』には散文も多く收められているが、巻四には「尊農篇」と題された一篇がある。これは、弟子との問答を通じて、南城が儒教倫理に基づく「尊農の説」を説明するという内容である。南城は表題どおり、尊農思想を門人に對して教えているのである。

さらに、南城が開塾直後に作っている「南城三餘堂　塾式」を見てみると、中に「道路農作を害すべからず、竹木を折るべからず[十三]」の項がある。私塾における學則の類の中にこうした項目があるのは珍しい。三餘堂の塾生は主に十四五歳の少年たちである。農民に迷惑をかけまいとする配慮からのものではあろうが、こうしたことを塾式にまで謳っているのは、彼に尊農思想があるからなのであろう。

このように見てくると、「嘉納途中」やその他の詩に描かれていた南城の農民に對する謙虚な態度は、彼の尊農思想を背景にしたものだと知られよう。

（三）南城の生活

南城の生活はどのようなものであったのか。その著述の多さから[十四]、經書類の注解に多くの時間を費やしたことは容易に想像できる。その一方で南城は魚釣りも好きだったらしく、妻から「釣りきちがい（釣魚顛）」と呼ばれていたようである。[十五]地域の人や柏崎の文化人との交際はどの程度行っていたのであろうか。次は「春日偶吟」（巻七）と題する詩のその二である。

二十餘年不入城　　二十餘年城に入らず、
山窓一几守幽貞　　山窓一几、幽貞を守る。
春來暫廢研究事　　春來暫く廢す、研究の事、
雪寺尋梅聽早鶯　　雪寺に梅を尋ねて早鶯を聽く。

二十年以上も柏崎の町には行ったことがなく、山居して靜かに机に向かい、常に經書の研究を續けている、と言う。南城は別の詩でも「泛交友を求むるは吾が事に非ず」[十六]と言っており、町の人々と交際して友を求めようとはしなかったことが分かる。一般に地方に住んだ儒者であっても、多くは他の儒者や詩人と交際している。しかし南城の場合、『三餘集』に見られる交友の詩は三餘堂の門弟と交わされたものがほとんどで、町に住む儒者や文化人との交際のようすは窺えない。しかし、この詩で梅を尋ね鶯の聲を聽きに出かけたと詠っているように、南城は日常的に近隣の地域を歩いていたことが分かる。また、「人日小集」（卷十一）の詩は以下のような詩である。

毎春斯日例招賓　　毎春の斯の日、例として賓を招く。
手自割烹慶瑞辰　　手自ら割烹して瑞辰を慶す。
終席共論東作事　　終席共に論ず、東作の事、
一言不及毀人倫　　一言も人倫を毀ぶるに及ばず。

正月七日、自分で料理して客をもてなす。話は春の耕作のこと、他の人の批評などはしないと詠っている。[十七]南城が地域の人たちとよく交際し、農耕のことをいつも話題にしていたことが分かる。これは農村に暮らした儒者南城の特色といえるだろう。

三　南城の田園詩

（一）「實錄」と「實況」

『三餘集』巻十一に「農家四時絶句十六首」がある。これらの詩の最後に、南城は「吾が溪農家の風俗を寫せり。意は實錄に在り。句調を顧みるに暇あらずと云ふ。」[十八]と述べている。ここには、南城の作詩についての方針が窺える。詩はなによりも實錄であることを重視し、そのためには詩の聲調や品格は考えないという立場である。

それでは以下に、その十六首の中から春夏秋冬のそれぞれ一首ずつを抜き出して「農家の風俗」がどのように「實錄」されているかを見てみよう。まずは「春」である。

蠒鳴知水暖　　蠒鳴きて水の暖かなるを知り、
螺出覺泥融　　螺出でて泥の融くるを覺ゆ。
便是春耕候　　便ち是れ春耕の候、
湯花祭社公　　湯花もて社公を祭る。

農家は暦によらず、蛙や螺など自然界の様子を見ながら農作業の時期を判断していることを述べ、さらに春耕の時の「社公を祭る」行事が述べられて、年の豊作を祈願する思いが表現されている。この結句については南城は「祝るに青篠を以る鍋の湯を轑して之を揮ふを、湯花と曰ふ。」[十九]と注を付けており、内山氏はそれを引き、「湯花もて社公を祭る」とは「神社において、鍋の中の湯を青笹ですくって撒き、豊作を祈る神事」と言う。[二十]確かにここには地域の風俗が描寫されている。次は「夏」。

金鼓儺蝗夕　金鼓儺蝗の夕べ、
村村列炬光　村村列炬の光。
投蟊卑炎火　蟊を投じて炎火に卑ふ。
周禮在吾鄉　周禮吾が鄉に在り。

夜に金や鼓を打ち鳴らし蝗を追い拂う。村中で、列を作ったたいまつの光が續いている。人々は害蟲のねきりむしを炎に誘い込む。蝗を追い拂う古來からの禮法は私の村里に殘っているのだ、と詠う。ここでも南城は注を付けて、「毎夏六月十四夜、鯖溪鄉の俗に蝗を驅る。盖し古禮なり。(二十一)」と述べている。「鯖溪鄉」とは、南條には鯖石川が流れていることに由來する呼稱である。この詩に描かれているような「蟲ばらい」(蟲送り)の風俗は全國各地で行われていたものであろう。次は「秋」。

灌田功已畢　灌田、功已に畢り、
畎澮自由流　畎澮自由に流る。
爭水人安在　水を爭ふ、人安くにか在る。
稻花魚躍秋　稻花、魚秋に躍る。

田に水を引きおわって、水は用水路を自由に流れている。我が田に水を引こうとして爭いをする人はもうどこにもいない、と分かりやすく情景を描いているが、結句には説明が必要で、南城の注に「河魚、稻花を食べて後味美し。(二十二)」とある。つまり、この秋、稻に花が咲き、その花を食べた味の良い魚が川で飛び跳ねている、との意である。内山氏はこの注を引いて、南城に魚釣りの趣味があったことを踏まえ、「ここでは農作業の後、趣味の魚釣りに心が誘われるさまを歌う。」と言う。(二十三)最後は「冬」である。

雪深門絶跡　雪深くして門跡を絶す。
未見紙商來　未だ紙商の來たるを見ず。
學童資給盡　學童資給盡く。
木筆畫爐灰　木筆もて爐灰に畫く。

雪が深く、紙を賣りに來る商人もまだやって來ない、塾の學童に渡す紙ももはや盡きてしまった、と詠う。三餘堂には「紙商」がやってきて紙を買ってたことが分かる。また、南城は「山民寒中に紙を製し、歳末に來り賣る。」[二十四]と注をつけていることから、製紙が地域の冬の仕事として行われていたことが知られる。

以上見てきたように、「農家四時絶句十六首」は確かに「實錄」の詩であるが、『補漏』には「詩ハ實錄ヲ主トスヘシ」とあり、[二十五]そうするとは「實錄」は南城の作詩全般における基本的な姿勢であると言える。南城はさらに續けて「美、春葩のごときも實況にあらざるものは余取らず。杜を詩史と稱するも實錄なる故なり。」[二十六]と述べていて、内山氏はこれに基づいて、南城の詩論を實況説と呼んでいる。[二十七]ここで注目しておきたいのは、南城の「實錄」には「杜を詩史と稱するも實錄なる故なり。」と言うように「詩史」という觀點が含まれているという點である。「實錄」の詩を作ることは歴史の記錄につながるという考え方である。ただ、南城の場合、それは社會的な事件ではなく、地域の實情に關することである。

また、内山氏は述べていないが、南城は「實錄ヲ主トスヘシ」と言っているから「實錄」と「實況」との區別を考えているに違いない。つまり、「實況」は「實錄を主」とする作詩の方法ということになろう。では、「實況」とはどのような作詩の方法なのであろうか。

次の「插秧女」（卷八）と題する古詩（七言歌行）を見てみよう。

細聲淫液插秧歌　　細聲淫液す、插秧歌、
羣女出田風日和　　羣女田に出で、風日和す。
兩袖各攘紅襷褌　　兩袖各ゝ攘る、紅襷褌、
野服雖麁態婀娜　　野服麁なりと雖も態婀娜なり、
丁莊在畔投秧把　　丁莊畔に在りて秧把を投ず。
手之分插郤行斜　　之を手にして分かち插し、郤行斜めなり。
只恐幃裳漸泥水　　只恐る、幃裳泥水に漸すを。
況爲投秧被點汚　　況んや投秧の爲に點汚せらるるをや。
一區插遍姑拔脚　　一區插すこと遍くして姑く脚を拔く。
木梳臨水斂鬖髿　　木梳水に臨み、鬖髿を斂む。
君不見女兒天性好爲容　　君見ずや、女兒天性好みて容を爲すを。
身居卑劇亦情同　　身卑劇に居るも亦情同じ。
在家梳洗猶之可　　家に在りて梳洗して猶ほ之れ可なり。
今日何爲于泥中　　今日何爲れぞ泥中に于てするや。

聲を長く延ばして田植え歌を歌う早乙女。兩袖を紅いたすきでからげている。着物は粗末だが、姿かたちはあでやかだ。泥水で汚れてしまうのを心配し、田圃の水を見ながら櫛で髪を整えたりしている。苗を投げる男たち、一區畫苗を植えては一歩ずつ足を田から拔いて移動する女たち、と田植えのようすをそのまま寫し取って描寫している。しかし、この詩全體の詠い方は實景を描くだけに止まらず、娘の所作に焦點を當てながら田植え仕事の中での

女らしい心情を描き出している。つまり、南城の描寫は寫實を基本としながらある事物に焦點を當て、時間の經過と人物の心情も含めてその場の狀況を彷彿とさせるように描こうとする手法である。

近體詩も見てみよう。次は「田家秋晩」（卷三）その一首目である。

九月西收不築場　　九月西收、場を築かず。
索𣗳懸稻曝秋陽　　索𣗳稻を懸けて秋陽に曝す。
園園列樹週遭是　　園園の列樹週遭として是れなり。
俄見闔村黄壁牆　　俄に見る、闔村の黄壁牆。

起句は『詩經』豳風「七月」の「九月築場圃（九月場圃を築く）」を典故としている。九月、秋の刈りとった稲には特別な場所を作ったりしない。縄を衣桁のように張ったハサ木に、稲をかけて秋の陽にさらす。田圃に竝んだ木々は周り一面みんな同じように利用される。ある日氣がつくと村中に黄色い壁が出來ている、と詠っている。敍景詩ではあるが、刈り取った稲が壁のように高く稲架がけされているようすを「黄壁牆」と描寫している。寫實の中に比喩の技巧をまじえて、印象を鮮明にした詩である。

以上のように見てくると、「實況」は「實錄」を其本にしながらそこに表現の工夫を加えて場面を描き、何らかの詩的感興をもたらすようにする方法なのだと考えられる。

（二）農村の困窮

田園詩の題材としてよく扱われるのが、農村の飢餓や重税による困窮の様子である。南城が三餘堂を經營していた文政天保から安政にかけての間は饑饉が頻繁に起こっている。特に天保の大飢饉はよく知られている。このよう

な狀況の中で、南城はどのような詩作を行っているのだろうか。

次の詩は「凶年歎」と題する詩である。この詩は巻十三に收錄されており、安政三年ころの作ではないかと思われる。

一曝滌場供上租　　一曝、場を滌ひて上租に供す。
曽無遺滯利鰥孤　　曽て遺滯の鰥孤を利する無し。
食盡寒嫠醜嘑蹴　　食盡きて寒嫠、嘑蹴を醜じ、
求糧來販引光奴　　糧を求めて來り引光奴を販す。

「滌場」は『詩經』豳風、「七月」の詩に「十月滌場（十月場を滌ふ）」とある。「遺滯」とは遺秉と滯穗であると南城は注をつけている。「嘑蹴」は『孟子』告子上の「嘑爾而與之（嘑爾として之を與ふ）。」「蹴爾而與之（蹴爾として之を與ふ）。」に基づく語で、「嘑蹴の食」を意味する。人に見下されながら食の施しを受けることを言う。「引光奴」は南城の注に「引光奴は發燭なり。又焠兒と名づく。天錄識餘及び輟耕錄に見ゆ。鄉俗糧無き者は、之を賣りて以て蔬糲に代ふ。（二十八）」とある。この「凶年歎」は　税を納めれば米一粒も殘らない貧しい未亡人が、付け木を賣って食を得ようとする内容である。したがって、この詩も「凶年」の實情を傳える詩史としての意味を持つ「實錄」である。次の「冬日雜詠」（巻一）その一の詩も凶作を題材としている詩である。

誰道歲凶民泣饑　　誰か道ふ、歲凶、民饑えに泣くと。
今冬生計未全非　　今冬の生計未だ全くは非ならず。
山蕎不熟蹲鴟沃　　山蕎は熟せざるも蹲鴟沃え、
原菽雖荒萊菔肥　　原菽は荒れたりと雖も萊菔肥えたり。

凶作の歳で民は飢えに泣いている、というのが一般的な詠い方であるのに對して、この詩ではその逆の視點で農村の實情が述べられている。轉句の「蕎麥は熟していないが里芋はよく肥え、豆は不作だか大根が肥えている。」とは農村の狀況をよく知っているからできる表現である。中國の田園詩には農民の困窮と同時に政治の横暴が詠われたものがある。日本でもたとえば菅茶山の詩にも政治批判が見られる。しかし南城の詩では、農村のようすがありのままに述べられるだけで、社會の矛盾を指摘しようという意圖を持った作品は見られない。それはなぜであろうか。

「南城三餘堂　塾式」の第一に「國政の得失を議すべからず（國政之得失を不可議）」とある。柏崎では天保八年に大鹽平八郎の亂に刺激された生田萬が柏崎陣屋を襲撃する事件が起きている。この事件を南城は知らなかったはずはないが、南城にはこれに言及したものがない。南城の詩の中には、民の困窮に關して「豪長者」（＝勢力を持った金持ち）の姿勢を「利」として問題視することは見られるが[二十九]、いわゆる政治批判は全く見られない。南城は塾生に「國政の得失を議すべからず」を規律として守らせたが、同時に自分も「國政の得失」を述べず、詩作の上でもそれを實踐したのである。

（三）北國の風土

目崎德衛氏の『藍澤南城私抄』では、南城の作品約二百篇を八項に分類して掲載している。その八項は、一「山郷の詩趣」、二「雪との苦闘」、三「村人と共に」、四「三餘堂の師弟」、五「村儒の私生活」、六「青春と晩年」、七「詠史と土風」、八「旅吟と應囑」である。このような分類によって『三餘集』の全體をおおまかにつかむことができる。そして、ここに「雪との苦闘」とあるが、題材の面で南城の田園詩を考えた時、雪を題材にした詩は南城の

田園詩を特徴づける分類であると言えよう。次の詩は「大雪」（巻十一・その一）と題する詩である。

乾坤似不是人間　　乾坤是れ人間ならざるに似たり。
皜皜素光川與山　　皜皜たる素光、川と山と。
千里寒沙猶有塞　　千里の寒沙、猶ほ塞有り。
四方銀界遠無關　　四方銀界、遠く關無し。
民居築玉如僊窟　　民居玉を築きて僊窟のごとく、
鴉背點花疑白鵰　　鴉背花を點じて白鵰かと疑ふ。
雪中變色豈唯兎　　雪中色を變ずる、豈に唯だ兎のみならんや。
松竹失青皆作斑　　松竹も青を失ひて皆斑を作す。

天と地は人の世ではないようだ。川と山とは白い光を放っている。千里の砂漠にはそれでも要塞があるが、四方の銀色の世界には遠くまで隔てとなるものがない。民家はまるで白い玉となり仙人の住まいのよう。鴉の背中は白く花がついて白鵰かと思ってしまう。雪の中で色が變わるのは兎だけではない。松や竹も青青としたところがなくなり、皆白いまだらが出來ている、と詠っている。

第一句を、目崎氏は「とても人間の住むところではないわい。」と解釋している。(三十) この目崎氏の言葉は、越後の地を蔑視するものではなく、降雪の甚だしいことによる悲觀を言おうとしたものであろう。しかし、その解釋が南城の心情に合っているかは檢討の要がある。(三十一) 確かに越後の豪雪は人々の暮らしを成り立たせないようにすることもある。三餘堂についても、「大雪」（巻十一・その二）で「雪は茅棟を埋め屋將に崩れんとす。偏へに恐る、鋤徒の救應せざらんことを」(三十二) と農民が除雪に來てくれないと家が雪でつぶされてしまうと述べられている。だが、次の

「雪景」（巻三）のような詩もある。

天下清高賞　　天下、清高の賞。
越溪晴雪間　　越溪、晴雪の間。
白松寒秀色　　白松寒秀の色、
皜然羣玉山　　皜然たり、羣玉の山。

ここでは晴れた日の雪景色に對して「天下、清高の賞」と言い、雪を氣高いと見ている。これは、北國以外の人がこの景色を見て感じる印象と變わりのないものだと言える。もし雪に對する嫌惡や憎しみがあればこうは表現しないであろう。次の「苦雪吟」（巻十四）は雜言古詩で、越後の風雪のようすを描いている。

昔人曽畫朔風圖　　昔人曽て畫く、朔風の圖、
觀者寒慄粟肌膚　　觀る者寒慄して肌膚に粟す。
世俗稱之爲口實　　世俗之を稱して口實と爲す。
載在謝家五雜俎　　載せて謝家の五雜俎に在り。
雪谷老人讀其記　　雪谷の老人、其の記を讀み、
呵呵大笑作管窺　　呵呵大笑して管窺と作す。
寧識越山風雪色　　寧ろ識らんや、越山風雪の色、
浩浩茫茫不可模　　浩浩茫茫として模すべからず。
當其雪風大起殺逆來　　其の雪風の大いに起りて殺逆し來たるに當りて、
勇將猛卒目逃不敢眄睞　　勇將猛卒も目逃して敢て眄睞せず。

慘兮眼孔鍼刺　　慘として眼孔鍼刺し、
懍兮鬢毛鋒摧　　懍として鬢毛鋒摧す。
當面不辨咫尺　　當面咫尺を辨ぜず。
大地山河安在哉　　大地山河、安くに在りや。
故山民惡雪甚於毒蛇惡獸　　故に山民、雪を惡むこと毒蛇惡獸より甚しく、
疾首蹙頞如遇阨災　　疾首蹙頞、阨災に遇ふがごとし。
一夜十萬八千丈　　一夜十萬八千丈、
上下氣混爲一塊　　上下氣混じて一塊と爲る。
日月晦冥無晝夜　　日月晦冥、晝夜無く、
宛是混沌竅未開　　宛も是れ混沌、竅未だ開けず、
畫手固無眼可著　　畫手固より眼の著くべき無し。
凍毫一咶又何裁　　凍毫一咶、又何をか裁せん。

題名が「苦雪吟」であり、山民が毒蛇や惡獸のように雪を憎むことが述べられてはいるが、作品の主題となっているものは雪害による人々の苦しみではない。『五雜俎』の話柄を取り入れて、敍事的な面白さを加えながら風雪のすさまじさを描き、越後の風土を事實に卽して訴えようとしている詩である。そこに、作者の雪に對する悲觀の感情は感じられない。また、次の「首夏晴望」（卷五）は次のような詩である。

北方風土異　　北方風土異に、
四月是春晴　　四月是れ春晴。

松碧溪間雪　　松は碧なり、溪間の雪、
霞明野外櫻　　霞(か)は明かなり、野外の櫻。
貧村皆錦里　　貧村皆錦里、
陰嶺尚銀城　　陰嶺尚ほ銀城。
未知南國景　　未だ南國の景を知らず。
今日孰輸嬴　　今日孰(いつ)れか輸(ゆ)嬴(えい)。

北方の風土は獨特で、夏四月は春の晴天である。松は谷間の雪の中でいっそう緑を濃くし、朝燒け夕燒けは野外の櫻を照らして明らかである。貧しい村は皆錦のような美しい里であり、日陰の峰はまだ白い城壁のようである。南國の景色は知らないが、この景色と比べたらどちらが勝っているだろう、と詠っていて、この詩も北國の自然を悲觀的には見ていない。

したがって、總じて南城の詩では、雪は地域における風土の一つとして否定的に捉えられてはおらず、越後の雪の情景はありのままに描寫されていると言えるだろう。

四　菅茶山と南城

南城の江戸遊學期(三十三)は、古文辭派の詩を排し、清新を宗とする性靈説を主張した市河寛齋（一七四九～一八二〇）の晩年の頃である。當時は性靈説による宋詩風の詩が流行しており、南城も當然そうした影響を受けていたはずである。ただ、そればかりではなく、幕末近くに生きた南城はそれまでの多くの詩人、詩風を學んでいるはずで、南

城の詩作がどのような影響をうけているかは充分な考察が必要である。

ここでは『補漏』に見える記事を手がかりに菅茶山との關連を考えてみたい。菅茶山は江戸期における田園詩人としてよく知られている。茶山の詩は實景に卽したものが多く南城とよく似ており、田園に暮らして私塾を持ち、政治ともあまり關わりを持たなかった點も南城とよく似ている。南城は江戸にいて、仕官を求める儒者や利に從って行動する人々(三十四)が多かった中で、ある種の敬意を持って茶山の詩を讀んでいたのではないかと想像される。

では、茶山の詩を南城はどのように感じていたのであろう。『補漏』には、當時の詩人の「可レ取モノ」をいくつか擧げており、菅茶山の「秋日」については以下のように記されている。

山僧乞二我小園芳一。蕃菊胡枝秋海棠。忽挈二一籃一來作レ報。帶レ泥松覃滿厨香。

コレ實況ナリ因テ錄ス凡ソ實況ハ句ノ巧ヲ須タズ

この詩は『黄葉夕陽村舍詩』後編卷之八に「秋日雜咏」十一首中の十首目に載せられている。「コレ實況ナリ因テ錄ス」とあるが、南城はこの詩のどのような點を「實況」と言っているのであろうか。

僧の求めに應じて庭の花を與えたところ、すぐに僧はかごを提げてお返しにきた。泥がついたままの松たけのために臺所はよい香りで一杯になった、と詠っている。つまり、この詩は時間の經過とともに人物の動きが詠み込まれて場面が彷彿と感じられる詩である。題材は日常の平凡なことであっても、實際の場面が鮮明に描かれたことで、人物の心情までも讀者に感じさせ、一つの感興をもたらすことになる。その描寫の仕方が「實況」だというのであろう。「秋日雜咏」十一首中からこの詩が特に取り上げられているのは、以上のような點が南城をして注目させたからだと思われる。茶山の「村居」二首のその一の詩も見てみよう。

撞圃泥乾人出耕　　撞圃の泥乾き、人出でて耕す。

竹梢鵲語喜新晴　竹梢の鵲語、新晴を喜ぶ。
山妻治餉將攜去　山妻餉を治めて將に攜へ去かんとし、
且倩隣童護箭萠　且く隣童を倩ひて箭萠を護らしむ。

（『黄葉夕陽村舎詩』後編巻二）

綿畑の泥も乾いたので耕しに出る。かささぎは晴れたのを喜んで鳴いている。妻は辨當を作って持っていこうし、見つけた筍を隣の子供に見張っているように頼んでいる、と詠っている。

ここで作者は「山妻」の動きを巧みに寫し取り、田園の穏やかな時間の經過を描いている。讀者はここで、ありふれた日常の中に描かれた平和なひとときを感じ取るだろう。先の詩と同様な手法が使われた詩である。こうした茶山における「實況」は、おそらく茶山が表現技法として意識して行っているものではないと考えられる。なぜなら、これは茶山の作品の中に時おり現れている程度のものだからである。南城は茶山の作品を讀みながら、このような描寫の仕方を學んだのであろう。

五　結語

以上見てきたところによって、本稿の結論をまとめておこう。

南城は儒者として三餘堂を經營していたが、農業を重視し、農民に對しても敬意を抱いていた。南城は常に周圍の田園を歩き、地域の人々と交際していた。南城の農村や農民を描寫した詩には地域の風土風俗に關わるものが多く含まれている。それは一つの歴史の記錄としての意味も持つ。南城が言う「實況」の詩では實錄の精神を其本と

して南城の創意が加えられ、詩的感興を伴う作品になっている。南城の時代は飢饉が多發して社會不安が強かった時ではあったが、政治批判の詩を南城は作っていない。また、南城の田園詩における大きな特徴は北國の自然が豊富に詠われていることである。その詠い方は嚴しい氣候に困窮する庶民の生活を悲觀的にみて悲しみや苦しみを主題とすることが中心とはなっていない。そこにはやはり實錄の精神があって感情は抑制され、自然は自然としてあるがままに見て、そこに息づく人間の暮らしや風土のありさまを控えめながら肯定的に描寫しようとしている。南城は自身の作詩の方法を「實況」とよんでいるが、そこには菅茶山の影響が認められる。

本稿では、南城の詩作について考察する以外に、彼の生活に着目しながら北國の風土の描き方についても考えてみたのである。南城は田園詩以外にも多くの詩を作っている。詩人としての南城を解明するには今後も多様な面からの検討が必要である。

注

(一) 詩については、『日本古典文學大系　五山文學　江戸漢詩集』(岩波書店・山岸德平ら校注・一九六七年發行。)には南城の詩が三首採られている。

(二) 新潟縣立圖書館藏、全一七卷、一六冊。自筆稿本。全十七卷の作品收錄數は渡邊秀英氏によれば、散文一〇二編、韻文一八四四編で、總數一九四六編である(「藍澤南城」新潟縣高等學校教育研究會國語部會『國語研究』1號・一九五五年發行)。

(三) 何をもって田園詩とするかという判斷については、たとえば池澤一郎氏はその著『江戸時代　田園漢詩選』に收錄する作品を選ぶにあたって、「田園生活を詠じた詩歌のことで、おおよそ農村の景物と農民、牧畜者、

獵師らの勞働を題材とする」との『漢語大詞典』の説明を引いている。本稿でもそれに從っているが、田園詩かどうか區別しにくいものも多い。

(四) 目崎德衞著『南城三餘集私抄』は小澤書店・一九九四年發行。

(五) 内山知也著『藍澤南城　詩と人生』は東洋書院・一九九四年發行。

(六) 『北越詩話』は一九一九年刊、一九九〇年復刻版刊。上卷、七六四頁。

(七) 『論語私説』卷二、雍也第六「賢哉回也」章。『論語私説』(新潟縣立圖書館藏。六卷六冊稿本)は、六冊とも「越后　藍澤氏述」と書かれている。

(八) 詳しくは、拙稿研究ノート「藍澤南城の三餘堂」(『大東文化大學　漢學會誌』五十五號所收)、一七二頁、參照。

(九) 注八の拙稿「藍澤南城の三餘堂」、參照。

(十) 「困誓」は『孔子家語』困誓篇。刊本『三餘集』の注に「家語困誓篇、言雖困于道、而誓不廢學也(家語困誓篇、言ふこころは道に困しむと雖も、而れども學を廢せざるを誓ふなり)。」とある。

(十一) 「農書時或讀　依法養園蔬」

(十二) 卷七「春日偶吟」のその一にも「身老いて鋤(す)くに慵(ものう)し、半畝の畦(あぜ)(身老慵鋤半畝畦)。」とある。

(十三) 「道路農作を不可害　竹木を不可折」

(十四) 『周易索隱』六卷六冊、『古文尚書解』十四卷十四冊、『禮記講錄』八卷八冊、『春秋左氏傳私説』二卷二冊、『春秋左氏傳杜注講義』七卷(缺卷二)六冊、『論語私説』、六卷六冊『孟子古注考』七卷、『孝經考』二卷二冊、『荀子定義』一卷一冊、『三百篇原意』九卷九冊などがある。すべて新潟縣立圖書館藏。

（十五）『三餘集』巻一「雨後出釣無獲歸（雨後出でて釣るに獲る無くして歸る）」の詩に、「家人喚作釣魚顛（家人喚んで釣魚顛と作す）」とある。内山氏前掲書、一三九頁の譯による。

（十六）「泛交求友非吾事」（巻三「山莊題門」）

（十七）「一言不及毀人倫」の注に「吾門不禁評時人是非（吾が門、時人の是非を評するを禁ず）」とある。

（十八）「寫吾溪農家之風俗。意在于實錄。不暇顧句調云。」

（十九）「祝以青篠轑鍋湯而揮之、曰湯花。」

（二十）内山氏前掲書、三〇一頁。

（二十一）「毎夏、六月十四夜、鯖溪鄉俗驅蝗、盖古禮也。」。なお、この詩で「周禮」と言うのは書名としての『周禮』ではなく「古代の禮」の意味で用いている。

（二十二）「河魚食稻花、而後味美。」

（二十三）内山氏前掲書、三〇三頁。

（二十四）「山民寒中製紙、歳末來賣。」

（二十五）『補漏』巻五。『補漏』は新潟縣立圖書館藏、全十二巻、一、二巻は缺。

（二十六）「美如二春葩一而非二實況一モノハ余不レ取 杜ヲ詩史ト稱スルモ實錄ナル故ナリ。」『補漏』（巻五）

（二十七）内山氏前掲書、六四頁。

（二十八）「引光奴發燭也。又名焠兒。見天錄識餘及輟耕錄鄉俗無糧者。賣之以代蔬糲。」

（二十九）『三餘集』巻三「民難篇　勸父老建社倉（民難篇、父老に社倉を建てんことを勸む）。」

（三十）目崎氏前掲書、八三頁。なお、内山氏の譯は「雪の日の天地の樣子は人の世とは思えないほどだ。」（内山

氏前掲書、二九九頁）である。

（三十一）筆者は既に「藍澤南城における杜甫」（『大東文化大學　中國學論集』第33號・大東文化大學文學研究科中國學專攻院生研究會・二〇一五年發行・所收）において、南城の「大雪嘆」についての目崎氏との見解の違いについて述べている。

（三十二）「雪埋茅棟屋將崩　偏恐鋤徒不救應。」

（三十三）文化三年（一八〇六）頃から文政二年（一八一九）。南城の歸鄕の時期ははっきりしているが、江戸に行った年は明確ではない。

（三十四）廣瀨淡窓「儒林評」に、「當時高名ノ儒者十ニ七八。折衷學ナリ。其行狀。中頃ノ放蕩ニコリテ。少シク收斂ニ赴ケリ。然レトモ其利ニ走ルコト。極テ甚ダシ。」とある。『淡窓全集』中卷（日田郡教育會・一九二五年發行）による。